

漢法苞徳塾資料	No. 082
区分	診断・脈診（東鍼校・教材）
タイトル	古医書の脈法各種
著者	八木素萌
作成日	1997.01

1. 『黄帝内経・素問』の脈法

以下の二種類が記述されている。

A. 三部九候脈法

「三部九候論第 20」では、人体の上部・中部・下部の三部で、それぞれを更に細分して、天・地・人の三か所を指定している、それらの合計 9 ヶ所を脈診している。

上部とは顔面部である。

「上部の天」では「頭角の気を候がう」ものとし、「頤厭」穴に拍動している脈を触診する。

「上部の人」は「耳目の気を候がう」部位とし、「和髎・耳門」穴の所で脈診する。

「上部の地」は「口齒の気を候がう」部位とし、「両頰の動脈」

つまり「大迎～『太素』巻十四の註」・「巨髎～王冰の註」・「地倉～『類経』の註」などの穴位の脈拍を診る。

中部は腕部である。

「中部の天」では「肺を候う」のであり、「経渠」穴で脈診する。

「中部の人」では「心を候う」が、それは「神門」穴である。

「中部の地」は「胸中の気を候う」部位で「手陽明」である。

「合谷」説があるが、私は「陽谿」での脈診が適切と思う。

人部は脚部である。

「人部の天」で「肝を候う」・足の「厥陰」経であり、穴位は「五里・太衝」

～王冰は女子は「太衝」を診ると註している。

「人部の人」で「脾胃の気を候う」・足の「太陰」経の穴位で「箕門」である。

「人部の地」で「腎を候う」・足の「少陰」経の「太谿」穴を脈診する。

B. 脈口脈法

「脈要精微論第 17」「平人氣象論第 18」「玉機真蔵論第 19」それぞれに記述されており「脈口脈診」とか「脈口脈法」などと呼ばれている。

「脈要精微論第 17」では、長・短・数・大・上盛・下盛・代・細・濇・湧泉・弦絶などの名で脈状について述べ、それらの病証的な意味を論じ、また五臓の脈と胃の脈について脈状を詳論している。

「平人氣象論第 18」には、平人の脈と脈象、それらと「胃の気」との関係、五臓の平脈・病脈・死脈および五臓の脈象と四時の関係や順逆など、また、寸口部での脈診と尺皮診の事や、それらに関連する病証などが記述されている。

「玉機真藏論第 19」には、五臓の脈の四時の変化を、平脈・大過脈・不及脈において述べ、真藏脈と・脈象と予後などを論じ、四時に逆らう場合の脈象と、五実・五虚の症候や予後についての論、四診法の相関性や位置付けなどが論じられている。

2. 『靈樞』の脈法

小椋道益師によって昭和初期に復活させている。脈口と人迎の部との脈拍を比較対照して経絡の変動を判断しようとする脈診の方法である。

3. 『難経』の脈法

脈口（気口とも言う）脈診するものである。脈診部を上中下の三部に分け、その各部を浮中沈の深さに於いて脈診する。そして病因・病状・病の順逆を判別するものである。脈診部の左右の三部に三陰・三陽を配分する事が記述されている。その配当を、「経脈配当」と解釈するもの・「臓腑経絡の配当」とする者・単に「臓腑を配当」しているものと解釈するなどのように、解釈に相違が見られる。

『難経』が「三陰・三陽」の語を用いる場合の記述的特色を考慮すれば、季節の陰陽の消息を論じる場合と、経脈にウェイトを置いて人身を論じている場合だけであるから、人身における「寒熱」「陰陽」と「ウェイトを経脈に置きつつ臓腑」を診ている。つまり、「経絡・臓腑の変動」と「陰陽」および「寒熱」を診る脈診法である。

このように言うべきであろう。この「配当」も歴代の医家・研究者によって、極めて多様に解釈されている。しかし、上部・中部・下部を人身の上部・中部・下部に見立てる「三焦」配当のみに異見が見られない。

注意……今日では「経絡治療」の「六部定位脈法」は、当初の脈法から少しズレて理解されるようになって「六部定位比較脈法」と言われるようになっている。当初と異なって脈状の生理的・病理的意味を把握しようとしなくなっている。また、「[経絡治療の脈法]は『難経』に基づいている」という説明は、明らかに誤っている。「六部」への「経絡臓腑の配当」と記述している部分は、『難経』の「脈について論じている難」全体の文字量が約 6 0 0 0 字の 3 % にも達しない文字量である。故に、「[『難経』に基づく脈診法]」と言うことは、信じられない程に正しくない説明である。むしろ「大ボラである」と言わねばならぬ。

4. 『傷寒論』（含む『金匱要略』の説）

気口脈診法である。用語はかなり異なっているが、内容を見ると『難経脈法』に近似的である。ただ、足に「先天の気」「後天の気」を窺う脈法が追加されている。

病証と脈状に関する記述も『難経』より詳細であり、また、三陰三陽の病証に応ずる脈法の基本を確立している。「先天の気」は「太溪の脈」とも言う、「腎経」の「太溪」穴で脈診するのである。「後天の気」は「趺陽の脈」または「趺陽脈」と言い、足胃経の原穴「衝陽」穴で脈診する。

5. 『李東垣の脈法』

脈口の左右の脈状を診るものである。左の脈口を「人迎」、右の脈口を「気口」とし、左右を対照して、病の性質や順逆や内因か外因か？をも、判断しようとする脈法である。

井上雅文氏の『脉状診の研究』は、この方法を復活し、また、鍼灸治療に役立てられるものにした。

6. 『時珍の脈法』

『奇経八脈考』（李時珍・著）に記述されたが難解である。とは言え、後にこれを説明した『脈書』が数多く書かれて運用しやすくなっている。「奇経」の病証と、「奇経」の変動を診る脈診法である。